

田原本町埋蔵文化財調査年報 4

1992・1993 年度



笠鉢山古墳第1次調査



笠鉢山古墳第1次調査



法楽寺遺跡第1次調査



十六面・薬王寺遺跡第10次調査

1994

田原本町教育委員会

目 次

I. はじめに.....	1
II. 調査した遺跡の概要	
1. 平成4年度	
(1) 唐古・鍵遺跡50次調査.....	4
(2) 唐古・鍵遺跡51次調査.....	7
(3) 唐古・鍵遺跡52次調査.....	10
(4) 保津・宮古遺跡第8次調査.....	11
(5) 平野氏陣屋跡第3次調査.....	12
(6) 十六面・薬王寺遺跡第9次調査.....	15
(7) 為川南遺跡第1次調査.....	16
2. 平成5年度	
(8) 唐古・鍵遺跡第53次調査.....	18
(9) 唐古・鍵遺跡第54次調査.....	21
(10) 唐古・鍵遺跡第55次調査.....	23
(11) 十六面・薬王寺遺跡第10次調査.....	25
(12) 平野氏陣屋跡第4次調査.....	27
(13) 平野氏陣屋跡第5次調査.....	29
(14) 法楽寺遺跡第1次調査.....	31
(15) 羽子田遺跡第5次調査.....	33
(16) 笹鉢山古墳群第1次調査.....	36
III. 試掘調査・立会調査の概要.....	39

例 言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が平成4年度・5年度に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文中に記載された遺構の記号については、「SD」が溝を、「SK」が土坑を表す。
4. 本年報の執筆は各調査担当者があたり、編集は藤田三郎・清水琢哉が行った。

I. はじめに

田原本町における平成4年度の発掘届、通知は19件、5年度は34件である（第1表）。低成長時代を反映してか本町における開発行為も落ち着いてきた感がある。平成4年度は19件のうち、発掘調査で対応したのは8件あり、7件が本町教育委員会、1件が奈良県立橿原考古学研究所で調査を実施した。また、平成5年度は15件が発掘調査で、うち本町は14件（試掘5件）、奈良県立橿原考古学研究所が1件対応している。立会調査は平成4年度が20件、平成5年度が10件である。

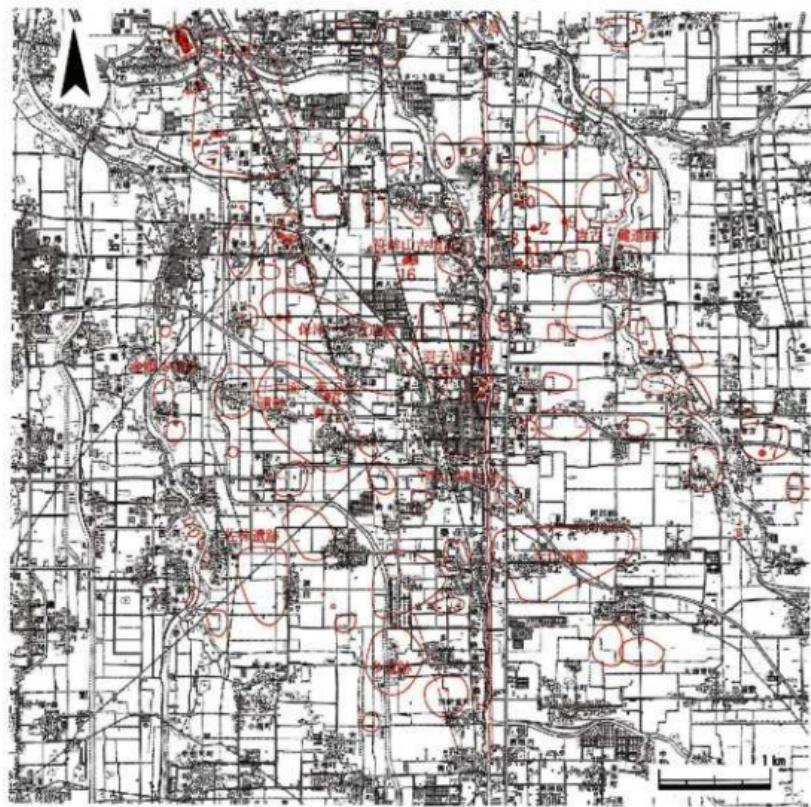
これら2年度にわたる発掘調査では、各時代において重要な成果がみられたので簡単にまとめてみよう。

弥生時代の調査としては、唐古・鍵遺跡の第50次から55次におよぶ調査が大きな成果を上げている。第50・53次調査は遺跡中央部で、弥生時代前期の谷地形を確認し、前期のムラが3ないし4つに分立することがほぼ確実となった。第51次調査では北地区の集落内部で井戸などの居住遺構、第52・55次調査では環濠を検出している。また、遺物ではヒスイ勾玉、碧玉管玉など弥生時代としては非常に大きいもの（第53次）、大阪湾型銅戈を描いた絵画土器（第50次）、天竜川流域（第50次）・吉備地方（第51次）の搬入土器、人形土製品（第51次）、流紋岩原石（第52次）、刻み梯子や柱材（第54次）、刻み梯子の未完成品（第55次）などが出土し、遺構遺物とともに遺跡の内容を充実させつつある。

唐古・鍵遺跡の他、羽子田遺跡第5次調査では弥生時代中期・後期の井戸などが検出され、小規模な集落が営まれていることが判明した。また、井戸からは完形土器が多く出土し、良好な一括資料を提供した。

古墳時代の調査としては保津・宮古遺跡第8次調査の集落跡の調査がある。これは第3次調査で検出した2重環濠あるいは区画溝と考えられる溝の延長であり、ちょうど2条の溝が折れ曲がるコーナー部分を検出した。これによって、一辺が100m程の区画をもつ集落であることが判明した。この他、古墳の調査としては前述羽子田遺跡の調査で古墳（方墳？）1基、性格不明の大溝2条などを検出し、本地に古墳群が形成されていたことが明らかにされた。また、羽子田遺跡の北方1kmに存在する笹鉢山古墳の調査でも意外な成果がみられた。笹鉢山1号墳が2重周濠の前方後円墳で推定全長95mであること、北側には削平された円墳が存在すること、また、この円墳からは蓋・人物・馬形埴輪、椭形・笠形木製品など良好な状態で出土したことなどが上げられる。このように低地部での古墳の調査例が増加することによって、この地域に相当量の古墳が存在したことを証明し、奈良盆地における古墳群の地図も塗り変える必要がでてきている。

中・近世の調査としては、法楽寺遺跡、十六面・薬王寺遺跡第10次調査、平野氏陣屋跡第3～5次調査などがある。法楽寺遺跡では寺域内の井戸と考えられるもの、十六面・薬王寺遺跡では中世居館の東端の屋敷地の一部が明らかになった。平野氏陣屋跡の調査では江戸時代の大溝を検出し、陣屋や屋敷の区画溝と推定でき、また、ややずれた位置に室町時代の大溝の存在が確認され、陣屋形成以前と形成について少しはあるが推測できるようになった。



第1図 田原本町の遺跡と発掘調査地点

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届(57条の2)	発掘通知(57条の3)		発掘(県)	試掘	立会	計
平成4年度	9	10	通知分 実施分	8 7 (1)	0	11 11	19 19
平成5年度	26	8	通知分 実施分	15 9 (1)	5	19 10	34 25

第2表 平成4・5年度発掘調査一覧表

平成4年度							
遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時代
1 唐古・健	第50次	田原本町唐古 251~261番地東	田原本町	道字路整備	1992. 11. 10 ~12. 27	215m ²	弥生
2 唐古・健	第51次	田原本町唐古 125番地	田原本町	唐古塚開拓工事	1993. 1. 11 ~2. 4	50m ²	弥生
3 唐古・健	第52次	田原本町唐古 226~4番地	花アサノ	農家住宅新築	1993. 2. 8 ~2. 26	60m ²	弥生
4 保津・宮古	第8次	H田原本町宮古 375-1番地地	田原本町	道路拡幅工事	1992. 9. 28 ~10. 3	195m ²	古墳
5 平野氏碑跡	第3次	田原本町890-1	田原本町	田原本町役場 庁舎建設	1992. 8. 24 ~10. 9	420m ²	近世 ~近代
6 十六面・薬王 寺	第9次	田原本町保津270 ~2, 271-2番地	会社	安波石油作式 ガソリンスタンド建設	1993. 2. 4 ~2. 15	96m ²	中世
7 為川南方	第1次	田原本町為川南 方151-1番地	田原本町	用排水路整備	1992. 11. 9 ~11. 21	70m ²	弥生・奈良 ・室町
平成5年度							
遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時代
8 唐古・健	第53次	田原本町842 ~249-1番地	田原本町	道字路改修	1993. 11. 9 ~12. 28	225m ²	弥生
9 唐古・健	第54次	田原本町唐古 162~100番地	田原本町	道字路改修	1993. 11. 15 ~11. 25	110m ²	弥生 古墳~奈良
10 唐古・健	第55次	田原本町唐古 83-1番地	上島忠秀	自己駐車場	1994. 3. 7 ~3. 26	160m ²	弥生
11 十六面・薬王寺	第10次	田原本町十六面 126, 保津253番 地他計9畝	大倉忠嗣	建設資材置場	1993. 5. 26 ~6. 17	330m ²	中世
12 平野氏碑跡	第4次	田原本町890-1	山辺広域行政 組合	防火水槽設置	1993. 8. 2 ~8. 11	42m ²	中世 ~近世
13 平野氏碑跡	第5次	田原本町843番 地	松村 勝	住宅建設	1993. 8. 3 ~8. 13	45.5m ²	中世 ~近世
14 法楽寺	第1次	田原本町墨田 301-1番地	仲西 秀	住宅建設	1993. 8. 24 ~9. 10	60m ²	古墳・鎌倉
15 羽子田	第5次	田原本町新町48 番地	田原本町	プール建設	1993. 9. 20 ~10. 20	640m ²	弥生・古墳 奈良・中世
16 佐井山	第1次	田原本町八尾 258-1番地	田原本町	用排水路整備	1994. 2. 14 ~3. 9	236m ²	吉墳
							藤田 錠

II. 調査した遺跡の概要

1. 平成4年度

(1) 唐古・鍵遺跡第50次調査

立地と環境 遺跡は標高47~49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の中央部にあたり、第3次調査が東南東50m地点で、また、第33次調査が南側でおこなわれている。第3次調査では集落内部を走向する大溝（区画溝）が検出され、本調査地方向に走向すると考えられた。第33次調査では弥生時代前期から古墳時代前期にかけての大量の遺構・遺物が出土し、この付近が弥生時代前期から中期初頭にかけての南地区の一中心地区であることがわかった。この調査ではこれらの関連する諸遺構が検出されたと考えられた。

遺構と遺物の概要 検出された遺構と遺物には弥生時代前期から後期のものがある。弥生時代前期の遺構は、調査区の南端で大溝2条、また、中央から北で谷地形と考えられる遺構を1条を検出した。大溝はいずれも南南東から北北西方向に走向する大規模なものである。南側の大溝1（SD-107）は推定幅6m、深さ1.7mを測る。北側の大溝2（SD-103）は幅約6m、深さ1.3mを測る。谷地形は弥生時代前期以前の微凹地に形成されたもので、南辺



調査地全景（北から）

を確認したのみである。規模は幅53m以上、深さ1.8m以上あるが、規模のわりには浅いようである。この谷地形は弥生時代中期には完全に埋没している。

弥生時代中期の遺構には、土坑11基と大溝3条、小溝5条、柱穴、壺棺3基がある。土坑11基のうち4基が井戸である。この内、2基の井戸は土器を利用した井戸枠をもっていた。井戸1は調査区の中央あたりで検出したもので、人壺の底を打ち割り逆さにすえ井戸枠とし、胴部を穿孔した細頸壺が供獻されていた。井戸2は調査区の北端で検出したもので、底部を打ち割った大壺を井戸枠にしていた。大溝は調査区の北・中央・南の3ヶ所で検出した。大溝3は東南東から西北西に走向すもので、調査区の南端で検出した。規模は幅6.2m、深さ1.8mを測る。大溝は洪水による厚い砂層で埋没しており、その状況から第3次調査で検出した大溝（SD-07）の延長と考えられる。この大溝3からは、天竜川流域の搬入土器が出土した。大溝4は調査区中央で検出し、規模は幅5m、深さ0.9mを測る。ほぼ、東西方向に走向する。大溝5は調査区北端で検出した。南東から北西方向に走向する。規模は幅約4m、深さ1.2mを測る。本溝も大量の土器の、磨製石剣、銅戈を描いた絵画土器などが出土している。壺棺は大溝5の埋没した上につくられている。壺棺1は口頸部を欠いた短頸壺に胴部を割った広口壺を蓋にしていた。壺棺2・壺棺3は短頸壺の本体のみ残存していた。



大溝3完掘状況（弥生時代中期）

弥生時代後期の主な遺構としては、井戸 1 基と小溝 2 条（SD-104・SD-108）がある。井戸（SK-103）は径推定 4 m、深さ約 1.3m の大形井戸である。調査区の北端で検出した。河道上に掘削されている。井戸が埋没する過程で完形土器 2 点が投棄されていた。小溝（SD-108）は溝幅約 2.2m、深さ 0.8m を測る。調査区の北端で検出し、北東から南西方向に走向する。本溝から大量の土器、ヒスイ勾玉 1 点が出土した。

まとめ 今回初めて遺跡の中央部を縦断するかたちの調査となった。弥生時代前期には、遺跡中央部が谷地形であり、従来想定していた前期の微高地「北地区」「西地区」「南地区」の 3 つの核が確実となった。弥生時代中期には大環濠が形成され、中央の窪地が消滅し、居住区になり、弥生時代後期まで存続することがわかった。しかしながら、居住密度は前期以来の居住場所に比べ、低いものである。調査区の南端で検出した大溝 1・2 は、南地区（第 33 次調査区）を囲む弥生時代前中期の環濠になることがわかった。また、環濠の外側（北側）には、溝内の堆積状況から土壘をもつ可能性がある。弥生時代中期の壇棺が 3 基並んだような状態でみつかったことにより、周辺でまだ数基見つかる可能性を呈していた。このような状況から判断するに、当場所が弥生時代中期には居住区になったとはいえ、「北地区」あるいは「南地区」の住人のムラはずれの意識が残っていたように考えられる。出土遺物では弥生時代中期の天竜川流域の搬入土器（壺）が出土した。このような壺の出土例では最も西の地域になり、唐古・鍵遺跡の交易圏の広さを示すものになろう。



▲井戸 2 井戸枠に転用された壺検出状況
(弥生時代中期)



絵画土器（壺）▶
(弥生時代中期)

(2) 唐古・鍵遺跡第51次調査

立地と環境 今回の調査地は、唐古池の南側堤防内部にあたり、唐古・鍵ムラの北地区になる。今回の調査地は、第26次調査と第37次調査の中間地点にあたり、弥生時代前期から後期の居住遺構が検出されるものと予想された。

遺構と遺物の概要 検出された遺構と遺物には弥生時代前期から後期の遺構がある。弥生時代前期の遺構は、調査区が小規模かつ工事時の擾乱によって遺構の把握が困難な状況であるが、土坑と落込みと考えられる遺構を検出したのみにとどまった。

また、柱穴群と小溝を調査区東半で検出したが、前期末か中期初頭ごろと考えられる。弥生時代中期の遺構には、大溝1条と小溝4条、井戸2基、土坑3基がある。大溝と小溝はいずれもほぼ南北方向に走向する。大溝(SD-103)は、調査区西半で検出した南南東から北北西方向に走行する溝である。溝幅約5m、深さ0.9mの規模を有する。本溝には橋脚と考えられる木杭が7本打ち込まれており、また、その延長線には小穴があり、これも一連の橋脚遺構であろう。遺物は中層から人形土製品やト骨、骨鑓、土器などが、下層の植物腐食土屑からは土器や骨、種子が多く出土した。小溝は調査区の西端で1条、東端で3条検出した。東端の溝2条(SD-102・SD-102B)は幅2m前後、他は0.4mほどである。井戸は調査区



▲大溝(SD-103) 完掘状況(弥生時代中期)

◀調査地全景(東から)

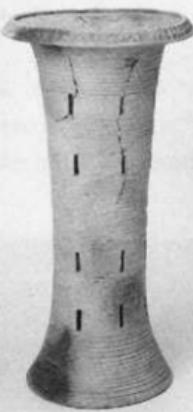
の中央と西端で検出した。中央の井戸は後期の井戸に切られているが、ほぼ円筒形を呈する整った井戸である。直径0.9m、深さ1.2mを測る。西端の井戸は長軸1.5m、深さ1.2mを測るが、井戸の壁面が軟弱なため、オーバーハングしている。弥生時代後期の遺構としては、井戸1基（SK-104）を調査区の中央で検出した。平面形態は楕円形で、長軸約2.9m、短軸推定2.4m、深さ1.6mを測る大きな井戸である。この井戸は上層から最下層まで豊富な遺物が出土した。上層から半完形の土器群、中層からト骨と思われる肩甲骨4点、下層では古備の大形器台のほか大量の土器、土玉、加工のある鹿角、木製杓子の未成品、盾、柄の着いたままの鉗、ト骨、イノシシの頭骨・下顎骨・その他の部分骨、鹿の下顎骨、ヒョウタン・クルミなどの種子類が多く出土した。また、最下層ではミニチュア土器が1点出土した。

まとめ 弥生時代前期の地形について、第26次調査地の微高地から第37次調査地の河道（南方砂層）に向かって、すなわち、東から西へ地形が低くなっていくことが判明した。弥生時代前期において、唐古池の西半には南北方向の微低地があったと考えられる。弥生時代中期には微低地は消滅し居住区となるが、本調査で検出した大溝はその方向や位置から名残であろう。この大溝では橋脚遺構がみつかったが、本遺跡では3例目である。後期遺構の分布状



井戸（SK-104）遺物出土状況（弥生時代後期）

況は周辺調査をみてもそれほど濃密でなく、後期段階は疎らな居住状況と考えられる。出土遺物について、多種類で大量の遺物が遺構内より良好な状況で出土した。土器は弥生時代前期は少ないが、中期・後期の土器が多い。特に、後期の井戸からは大量の土器がまとまって出土した。後期初頭に位置づけられるもので、土器編年上、良好な資料になろう。また、そのなかには、吉備の大形器台が含まれている。この器台は畿内地方ではほとんど例をみない優品で、第19次調査で出土した吉備の大壺とその作風は非常に類似している。祭祀遺物として人形土製品が出土した。頭部を欠失しているほか、ほとんど完存している。腕や下半身は作り出されていないが、前・後面はわかる。このような土製品は弥生時代のものとしては例がなく、弥生土偶といえるものであろう。これが、縄文時代の土偶からの系譜なのか今後重要な位置を占めることになろう。



▲井戸^f (SK-104) 出土吉備の器台
(弥生時代後期)



▲井戸^f (SK-104) 出土絵画土器



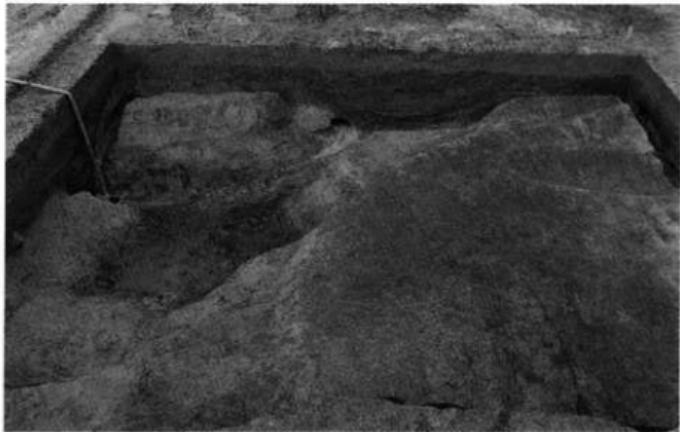
人形土製品 ▶
(弥生時代中期)

(3) 唐古・鍵遺跡第52次調査

立地と環境 今回の調査地は遺跡の南西部に当たり、これまでに第32・33・44・49次調査が周辺でおこなわれている。今回の調査地は、特に第33・49次調査地の成果から弥生時代中期の環濠を検出する可能性が高いと考えられた。

遺構と遺物の概要 検出された遺構と遺物には、弥生時代前期と中期のものがある。弥生時代前期の遺構として明確なものがなく、調査区の東半において河道を検出した。この河道は粗砂層で埋没しており、河幅6m以上、深さ1mを測る。遺物は摩耗した土器片1片のみで時期判定は困難であった。しかしながら、この河道の北延長上にある第44次調査で弥生時代前期の河道を検出していることから、これにつながる河道として理解できる。弥生時代中期では1条の環濠と環濠に取り付く大溝1条を検出した。環濠は北東から南西に走向するもので、溝幅3m、深さ1mを測る。この環濠は第33・49次調査で検出した環濠(SD-108)の延長に当たるものである。環濠の南側は給排水用と考えられる大溝が接続している。大溝は調査区の西端で検出しているため、規模は明確にできないが、溝幅5m前後、深さ1.2mを測る。出土遺物は土器以外の遺物が少ないが、拳大から人頭大の円礫や角礫が40個余り出土し、このなかには耳成山産の流紋岩が約10点含まれていた。

まとめ 本調査は、これまでの調査で最も遺跡の西南部にあたるところである。調査では、弥生時代中期の環濠と環濠に取り付く大溝を検出することができた。環濠に取り付く大溝は、これまであまり明確でなかった部分であり、本地の南側の第39次調査で検出した弥生時代中期の河道と環濠を接続する溝と考えられる。



調査地全景(南から)

(4) 保津・宮古遺跡第8次調査

立地と環境 遺跡は標高45mの沖積地に立地する。今回の調査地は保津・宮古遺跡の北西部にあたり、北側にあたる第3・4次調査では、弥生時代から古墳時代の河跡や、飛鳥・奈良時代の建物跡が確認されている。

遺構と遺物の概要 古墳時代の土坑2基と溝3条を検出した。土坑の内1つは井戸（SK-101）である。調査区外に井戸がひろがるため規模はわからないが、推定直径1.6m、深さ1.7mを測る。遺物は少ないが、上層で板石（長さ60cm、幅33cm、厚さ6cm）と甕が出土した。溝は東北から西南方向に走向する溝2条を並行して検出した。西側の溝（SD-101）は調査区の南端で大きく弧を描くように走向する。溝幅約1.6m、深さ0.7mを測る。遺物には土器と板材がある。東側の溝（SD-102）はSD-101の西3mで検出したものである。溝幅約2.4m、深さ0.7mを測る。遺物には土器があるが、SD-101ほど多くない。この溝に重なるようにもう1条の溝を検出したが溝底のみの堆積であったため、規模は不明である。

まとめ 今回の調査では、第3次調査の西端で検出した溝の延長がこの調査でも検出することができた。のことから、2条の溝で囲まれた古墳時代前期の集落の範囲（推定1万m²）を確定できた。

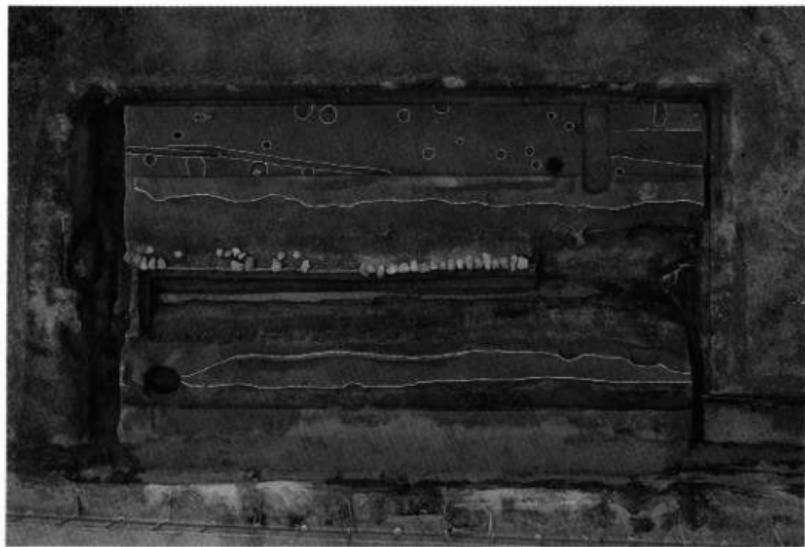


調査地全景（古墳時代前期）（東から）

(5) 平野氏陣屋跡第3次調査

位置と環境 遺跡は標高49～50mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の北端部にあたり、寺川の西側に隣接する。当遺跡北西には羽子田遺跡（古墳群）があり、北東約1kmには古墳時代中期の円墳や中世の環濠集落が検出された小阪里中遺跡がある。調査地は古絵図に描かれた平野氏陣屋本体北側の家臣屋敷地周辺に相当する。

遺構の概要 調査では鎌倉時代～明治時代と平安時代前期の遺構面を2面検出することができた。平安時代前期の遺構面は調査地の西辺部で調査した。遺溝は溝を4条、ピットを19基検出した。主要な遺構は調査地の南側で検出した幅約30cm、深さ約5cmの小溝2条とピット内にこぶし大から人頭大の円礫石を5～6個もじいた集石を伴う遺構2基である。小溝は真北から東に約8度傾いた方向性をもつ。また、詳細は不明であるが、調査地北東隅にこの時期の小河道があることを北壁土層の観察で確認した。鎌倉時代～明治時代の遺構面では鎌倉時代～室町時代の小溝群と河道、江戸時代の大溝、江戸時代末期～明治時代の土坑と井戸をそれぞれ検出した。鎌倉時代～室町時代の小溝は10条で、幅20～40cm、深さ5～10cmの規模を測り、ほぼ南北方向をとる。河道は調査地の東辺部において検出した。ほぼ南北方向をとる。河道の中心は調査地より東側にあるものと考えられ、調査では河道の西側肩部を確認した。堆積状況から鎌倉時代～室町時代前期頃と、室町時代後期～江戸時代初頭頃に洪水



調査地全景（右が北）

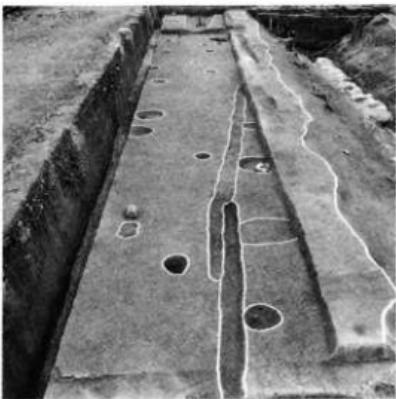
による堆積砂で埋没したものと考えられる。江戸時代の遺構は、調査地の中央部で幅約7m深さ約2mの南北方向の大溝を検出した。大溝は掘削された当初は素堀りの溝であり、掘削時期は出土遺物から江戸時代前期頃であったものと考えられる。江戸時代に掘削された大溝は江戸時代末期～明治時代頃に改修を受け、西岸が石垣積み、東岸が杭で護岸され、幅約3m、深さ1.5mの規模となる。付属施設として調査地の南端部で堰を、調査地の北半部分に石垣から西側約1.5mの距離で石垣に並行した位置に樹木の根を5本、約2m間隔で検出した。土坑は直径約1.3m、深さ60cmの平面形が円形のものである。井戸は直径約80cmの平面形が円形のものであり、直径70cm、長さ約40cmの瓦質の井戸枠を5段以上埋め込んだものである。掘削は検出面から約1.8mの深さまでおこなった。上から2段目の井戸枠には漆喰で補修した痕跡が認められた。

遺物の概要 遺物は大溝を中心に瓦質の火鉢類や土師質の火鉢・ほうらく・小皿などの土器類、肥前系や瀬戸美濃系の陶磁器類、瓦類、砥石・硯・火打石などの石製品、金属製品、ガラス製品、木製品など大量の近世～近代遺物が出土した。また、弥生時代の土器や古墳時代の須恵器・土師器・埴輪などのほか、韓式系上器や綠釉陶器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・中国製の青磁や染付など古代～中世の遺物も少量ながら出土している。

まとめ 今回の調査では平安時代前期から明治時代頃までの遺構を検出することができた。とくに、平野氏陣屋に関わる堀（大溝）と旧寺川と考えられる河道を検出できたことの意義は大きいと考えられる。堀（大溝）は出土遺物からみて江戸時代前期（17世紀前半）の陣屋建設時に掘削されたものとみられる。この堀は後に西岸が石垣で護岸されるが、その時期は出土遺物からみて江戸時代末期～明治時代頃のことと考えられ、明治元年（1868）の田原本



調査地位置図



平安時代遺構全景 (南から)

藩成立時に改修を受けた可能性が考えられる。堀(大溝)の廃絶については、大正4年(1915)の田原本尋常小学校・平面図に堀(大溝)と井戸が描かれていることから、この後に埋め立てられたものと考えられる。なお、堀(大溝)を埋め立てた土からは近代の遺物に混じり円筒埴輪の破片が多数出土したことが注目される。これらの埴輪は当調査地北西に隣接する羽子田古墳群のものであった可能性が高い。平野氏陣屋が建設される以前の状況は、調査地の西側は南北方向の小溝を多数検出したことから畠地あるいは水田が展開していたものと考えられる。また、調査地の東側は南北方向に河道が流れていたことが明かとなった。河道は洪水により室町時代後期～江戸時代初頭頃に埋没したものと考えられ、陣屋建設時までに東側(現寺川周辺)に流れを移したものとみられる。この河道は鎌倉時代後期～室町時代前期頃にも洪水により埋没した様であり、河道の下には方向性の異なる平安時代前期の小河道があることから、南北方向に流路をもつ、すなわち条里制の土地区画方向に合致した河道が開削される時期は平安時代後期～鎌倉時代前期頃を推定することができよう。以上、平野氏陣屋(田原本藩)に関わる堀(大溝)の掘削時期、構造、規模等について明らかにできたことは、從来実体が不明であった平野氏陣屋の全体像解明に対して貴重な資料を提供したといえる。また、寺川の前身であると考えられる河道の開削時期をある程度推定することができたことも、奈良盆地における条里制土地区画の実際の施工時期を知る上での貴重な資料を提供することができたといえる。



大溝(江戸時代)(北から)

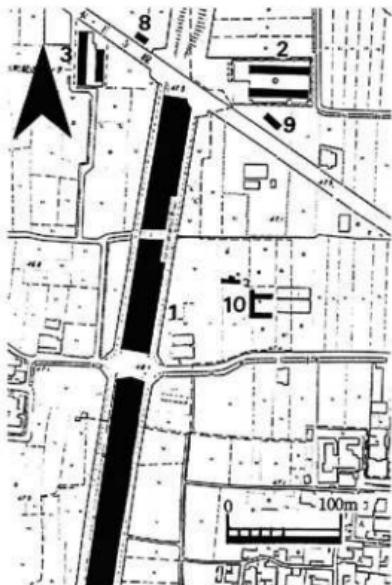
(6) 十六面・薬王寺遺跡第9次調査

位置と環境 遺跡は標高46~47mの沖積地に立地する。十六面・薬王寺遺跡はこれまでの8次にわたる調査で、弥生時代の河道や古墳時代の方形周溝墓、古墳時代~奈良時代頃の水田遺構、中世の集落跡などが検出されている。なお今次の調査地は遺跡の北縁部に位置し、奈良県立橿原考古学研究所が調査した第1次調査地北端部の東へ約60mの地点にあたる。

既往の調査成果から当該地は古代~中世の耕作遺構、あるいは中世の集落関連遺構の存在が予想された。

遺構・遺物の概要 調査は長さ約16m、幅約6mのトレンチ調査をおこなった。その結果、遺物包含層を2層確認したが、遺構を検出することはできなかった。遺物は須恵器・土師器・瓦器などの小片が遺物包含層から出土した。

まとめ 今回の調査では、中世の遺物包含層と古墳時代の遺物包含層が存在すること、第1・7・8次調査などで確認されている中世や古墳時代~奈良時代頃の水田遺構がすでに削平を受けていること、当調査地周辺が遺跡の周縁部にあたり遺構が稀薄な地点であることなどを明らかにすることができた。



調査地位置図



調査地全景（南東から）

(7) 為川南遺跡第1次調査

位置と環境 遺跡は標高57mの沖積地に立地する。初瀬川が遺跡の西側を流れ、周辺の遺跡はこの川沿いに分布をみせる。当遺跡南東約1.5kmには古墳時代の大規模な集落として知られる纏向遺跡があり、北西約2kmには中世の環濠集落が検出された法貴寺遺跡がある。調査地は平安時代から古墳時代の遺物散布地として周知された範囲のほぼ中央に相当する。

遺構の概要 南北総延長70m、東西幅約1mの細長い調査区で弥生時代から室町時代に至る諸遺構を検出した。弥生時代の遺構は調査区南端から約55mまでの南側の大半を占める河道である。深さは検出面から約0.6mを測り、南東から北西方向をとる。土層堆積状況から、本調査区の南西側に河道の中心部があるものと考えられ、方向性を考慮すれば川幅45m以上を推定できる。この河道は氾濫原を形成し、最終埋没が鎌倉時代後期頃であると考えられる。

奈良時代の遺構は調査区北端部の土坑・ピット・溝で構成される。ピットは直径20~30cm、深さ5~10cmの平面形が円形のものが11基、やや大きめの不整形のものが2基、溝は幅10~20cm、深さ5cm程度の小溝を2基、幅2.5m残存深約30cmの東西方向大溝を1条検出した。土坑はSK-03などで、SK-03が東西約70cm、南北約50cm、深さ15cmの椭円形のものである。室町時代の遺構は土坑1基、溝2条、道路状遺構で構成される。土坑は直径



調査地全景（南から）



奈良時代遺構（北から）

1.3m、深さ25cmを測り、平面形が不整円形、断面形が逆台形状をなす。溝は幅15cm、深さ約3cmの南北方向の浅い小溝（SD-01）と、幅30~40cm、深さ約5cmを測り、東西方向をとる溝（SD-04）がある。道路状遺構は幅約3m、高さ10~15cmの畦畔状の高まりである。この土の高まりは整地土と考えられ、多量に土器の細片を含む固く締まった砂質土の堆積である。SD-04はこの道路状遺構の北側溝と考えられる。

遺構の概要 遺物は弥生時代後期の高杯・壺などが河道最下層から、奈良時代の土師器杯・壺、須恵器杯・壺がピットなどから出土した。特に、SK-03からは土師器把手付壺・小形壺・杯など奈良時代前期（8世紀前半）の土器がまとまって出土している。また道路状遺構の整地上から縁軸皿、瓦器椀、丸瓦などが出土した。

まとめ 当調査地の南側の大半が弥生時代から鎌倉時代にかけて河道であったことが明らかとなった。この河道は旧初瀬川の一支流であったものと思われ、現代確認されるところの旧初瀬川水系の最北辺の支流と考えられる。また調査地北端部において奈良時代の遺構・遺物を検出したことの意義は大きい。これによって奈良時代の集落が北側に展開することが明らかとなった。おそらくは、検出した東西方向の大溝によって集落南端を、南側の河道氾濫原に対して区画していたものと思われる。室町時代の遺構は稀薄ではあったが、道路状遺構によって北側と南側に区画された農耕地（？）が展開していたものと思われる。また、道路状遺構は条里制土地区画の方向性とほぼ一致し、鎌倉時代後期頃の河道埋没後の開発の一環として成立した可能性がある。道路状遺構を調査区外西側に延長した場合に、方向性の一致する畦畔が存在することや、土地の境界線と一致することも興味深い。



奈良時代遺構（南から）

1. 平成5年度

(8) 唐古・鍵遺跡第53次調査

位置と環境 遺跡は標高47～49mの沖積地に立地する。今回の調査地は遺跡の中央部に当たり、これまでに第37・50次調査が周辺でおこなわれている。本地の北側における第37次調査（唐古池内部西南隅）では、弥生時代前期の河道（南方砂層）？・中期の河道？・木器貯蔵穴などを検出している。また、本地南側の第50次調査地北端では前期～中期の微低地が埋没していく過程が読み取れた。この状況から、南の微高地部分（居住区）から不安定な微低地部分が展開していることが判明した。今回の調査では、特に第50次調査の成果から弥生時代前期の微低地（谷地形）を検出する可能性が高いと考えられた。

遺構の概要 調査対象地の水路改修部分において南北94m、幅2.5mの調査区を設定したが、調査地の堆積層が脆弱なため、弥生時代前期の遺構は一部の調査にとどまった。検出された遺構には、弥生時代前期～後期のものがある。しかし、井戸などの生活遺構の密度は低く、居住空間とは言い難い様相を呈している。ただし、微低地の埋没過程において大量の土器が廃棄されており、出土土器量はこれまでの調査のなかでも特に多い。弥生時代前期の様相は遺跡中央部に巨大な窪地（谷地形）があり、滯水した状態であることが判明した。谷地形は



調査地全景（南から）

緩やかな微高地を呈すが、2カ所ほど深く切れ込む所がある。谷の幅は最大148mを測る。この調査結果は当初推定していた前期の集落が3ないし4カ所に分かれていたことを裏付けるものである。この他、前期の木器貯蔵穴1基と小土坑1基を検出した。特に注目すべきものとして、弥生前期の完形の壺が倒置した状態で出土した。さらに、この土器を取り囲むように大量の土器片と焼土が集中し、その近くから完形の小壺が出土し、特異な状況を呈していた。性格は不明である。弥生時代中期は前期の谷地形が完全には埋没しておらず、微高地として引き続き存在したようだが、大環濠の成立によって、高燥化が始まり、土坑11基、小溝2条、柱穴13基など居住遺構が調査区の南端の微高地とその周辺で掘削されている。弥生時代後期には顯著な遺構はない。谷地形がほとんど埋没し、調査地南端の微高地の縁辺がやや窪地（落ち込み）として残っているのみである。この落ち込みからは大量の土器に混じってヒスイの勾玉と銅鏡が各1点出土している。

遺物の概要 遺物は今までになく大量に出土したが土器が主となる。土器では前期の伊勢湾岸、信濃地域からの搬入土器が注目される。中期においては鹿、建物などの絵画土器が16点出土した。木製品では木器貯蔵穴の中層から高杯・広鏡・鉢の各未成品、原材などが出土し、特に高杯の未成品は杯部の長軸が50cmもある大型品で、製作工程の把握できる数少ない資



木器貯蔵穴遺物出土状況（弥生時代前期）

料となった。この他、斧柄未成品、杓子、高杯、広鏡、手網など前期の木製品がある。石器では100点を越す打製石鎌、環状石斧（漆付着）、多頭石斧、結晶片岩製の石庖丁の未成品・製品が大量に出土しており、とくに中期の段階では石器製作に関連する地区とも考えられる。

特殊な遺物として、後期の窪地（落ち込み）からヒスイの勾玉が出土した。全長5.26cm、厚さ2.14cmを測る。弥生時代の勾玉としては3番目の大きさになる。調査範囲が小規模なため、全体的把握が困難であり、今後、面的な調査が必要にならう。また、弥生時代中期後半の碧玉製の管玉も土器包含層から出土した。これは欠損品であるが、直径2.24cm、現長3.4cm（推定5cmぐらい）を測る巨大な製品である。

まとめ 今回の調査は遺跡中央部を南北に縦断するという極めて重要な調査であった。弥生時代前期においては、大きな窪地が存在し、3つの集落に分立していたことが判明した。中期では、大量の石庖丁の出土から石器製作に関連する地区であることを窺わせた。遺物では勾玉、管玉が弥生時代では類例のない大きいもので、この遺跡の富の象徴ともいえるものにならう。



▲倒置された壺と
その出土状況



▲碧玉製管玉



ヒスイ製勾玉▶



(9) 唐古・鍵遺跡第54次発掘調査

位置と環境 今回の調査地は遺跡の東端に当たり、西側を東西80mにわたり第27次調査として範囲確認調査をおこなっている。第27次調査では弥生時代各期の環濠と古墳時代後期の河道を検出している。

遺構と遺物の概要 検出された遺構と遺物には、弥生時代中期から後期の谷地形・河道と古墳時代後期から奈良時代の河道がある。弥生時代中期～後期は調査地全体が谷地形であり、当地の北あるいは南側に拡がるもようである。谷地形全体は深さ0.6mほどの微低地になってしまっており、局部的に切れ込んだ深い部分や河道（洪水）として流れたところがみうけられる。この谷地形の初期の様相あるいは時期については完掘していないため、不明である。出土した遺物から弥生時代中期後半ごろには微低地が埋没しかかっていたのであろう。後期後半には幅10m以上、厚さ1m以上の洪水堆積層が調査地南端にみられた。この洪水層（黄灰色粗砂層）から梯子や柱材、丸太杭、完形の壺などが出土地した。梯子は刻み梯子で、長さ118.5cm、幅18.9cm、厚さ9cmを測る完形品である。4段の足掛け部分が作り出されている。直径20cmほどの丸太材を半裁し、外側（樹皮側）のほうを刻んでいる。梯子の下端はやや尖りぎみに加工しており、地面に突き刺したのであろう。

古墳時代後期～奈良時代の河道は前述弥生時代の微低地部分に流れた洪水層である。調査地ではほぼ南南東から北北西方向に走行する。河道の東縁辺部分であって、本流は当地の西側であろう。出土遺物は古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器・土師器・瓦などが出土した。



まとめ 本調査地は、最も遺跡の東部にあたるところである。これまでの発掘調査ではちょうど環濠部分にあたることが多く、環濠帯外延の地形・状況はあまりおさえられていなかった。今回はちょうどその外側部分にあたり、少なくとも北東部の様子については語ることができるようになった。弥生時代中・後期の様相は遺跡北東部は谷地形になっており、その幅は100m以上あろう。おそらく弥生時代前期段階からの地形で、南東から北西方向にのびる谷地形（微高地）であったと考えられる。弥生時代中期後半にはその一部を洪水層として切り込んでおり（北方砂層）、大規模な洪水であったろう。後期も状況は同じであり、微高地はかなり埋没したと考えられるが、地形的には集落部分に比べ低く、滯水あるいは洪水を繰り返していた。後期後半の洪水層からは梯子や柱材など建築材、壺が出土しており、これら遺物の所有が唐古・鍵ムラの住人かどうかが問題になる。遺物の状況からすれば、あまり摩耗していないことから、近くから流されたものであろう。本地が唐古・鍵ムラの東端であることを考えると法貴寺遺跡（町9・志貴高校調査地）あるいは周辺の遺跡（町11・斎宮前・舞の庄）の遺物とするのが妥当であろう。

古墳時代後期の遺構・遺物については第27次調査において検出しており、今回検出した河道（洪水層）もそれと一連のものであろう。この時期の河道の本流は第27次調査地と今次調査地の間に流れ、幅20~30mで南々東から北々西方向に走行するであろう。出土遺物は多く、遠方から流されたとは考えにくく、時期的なものを考慮すると本地の南東600mにある法貴寺舞の庄遺跡のものと推定できる。



▲刻み梯子
◆河道遺物出土状況
(弥生時代後期)



(10) 唐古・鍵遺跡第55次調査

位置と環境 今回の調査地は遺跡の北西部に当たり、北側を第2・17次、南側を第12・15次、南西側を第31・42次調査としておこなっている。いずれの調査でもムラを附む環濠が検出されており、この周辺が環濠帯であることが判明している。このことから、本地も環濠を検出することが予想された。

遺構・遺物の概要 調査では弥生時代中・後期の環濠を2条検出した。いずれも北東から南西方向に平行して走行する大溝である。

環濠1 (SD-101) は溝幅2~2.8m、深さ0.8mを測る。溝の埋没状況から2時期（再掘削）が存在することが判明した。最初の掘削は弥生時代中期後半、再掘削は後期後半である。環濠は延長16mにわたって検出されたが、北側の4m部分は溝底のレベル、掘削斜面、溝の堆積状況が南側と異なっていた。これは溝掘削の工程（工区分け）とも解釈できる。出土遺物は少なく、土器がおもな遺物である。



環濠2 (SD-102)は調査区の東側（拡張区）で検出した環濠である。環濠1とほぼ同じ方向に走行する。溝幅4.4m、深さ1.1mを測る。本溝においても埋没状況から数回の再掘削あるいは溝さらえがおこなわれていたことが確認された。最初の掘削は弥生時代中期後半？で、後期後半には最終的に埋没したようである。出土遺物は下層の植物腐食土層から土器、梯子、柱材、丸太杭、丹塗りの飾り板？などがまとまって出土した。梯子は直径約17cmの丸太材に刻みを入れたもので、長さ約140cmを測る。歪んだ材を使っているため、直線的な梯子とはなっていない。加工痕が明瞭に残っており風化がないことから、未成品と考えられる。

まとめ 本調査地は、遺跡の西北部で環濠帯にあたるところである。これまでの調査で数条の環濠を検出しており、比較的遺構の状況がおさえられていたが、各調査で検出された環濠がどのようにつながっていくのか判断するのは難しく、各調査の空白部分を埋めていく必要があった。今回の調査は小規模であったが、まさにその空白を埋めるものとなった。また、出土遺物においては梯子の未成品が出土し、南20mの第15次調査において木っ端が多く出土していることを考慮するなら木器加工が周辺でおこなわれていたことも想定できよう。環濠1と2では出土遺物量が相当異なることから、環濠2までは生活領域で、行動範囲のなかであったのだろう。



◆環濠2



◆環濠2 遺物出土状況

(11) 十六面・薬王寺遺跡第10次発掘調査

位置と環境 十六面・薬王寺遺跡は弥生時代から近世に至る複合遺跡であるが、その中心は十六面と薬王寺集落の間に展開する中世の集落跡（居館）である。発掘調査は遺跡全体に及びこれまで9次にわたる調査を実施し、弥生時代の河道や古墳時代の方形周溝墓、古墳時代～奈良時代頃の水田遺構、中世の集落跡などを検出している。今回の調査地は遺跡の中央、やや北東に位置し、24号バイパス線の東50mにある。標高は46.5mで、周辺は水田と畑地が広がっている。

遺構と遺物の概要 検出された遺構には室町時代の井戸と区画溝、中世素掘り溝がある。井戸（SK-1001）は第1トレンチで検出したもので、径2.4m、深さ2.4mを計る。井戸の中位より下には瓦質井戸枠2段が据えられ、さらにその下に曲物を転用した井戸枠2段が設置されていた。遺物は土器や漆碗など出土しているが少ない。区画溝は第2～4トレンチで検出したもので計7条の大溝で構成されている。これらは時期的に前後関係があるようでどの溝が1つの区画を示すかは今後の整理に期したい。現段階で溝の性格が推定できるのは十六



東側環濠▶



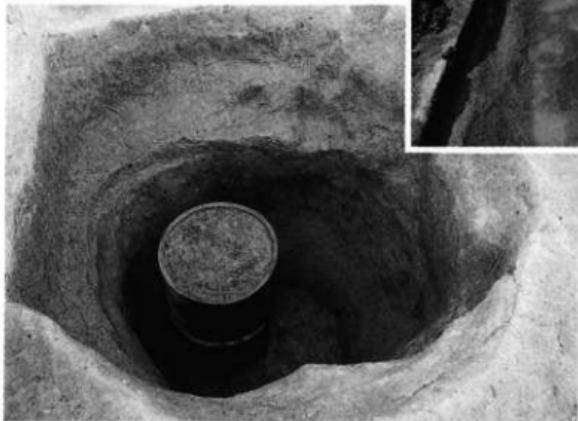
完掘状況▶

面・薬王寺中世居館の東側環濠（外堀）と考えられる南北大溝（SD-2050・4050）である。この大溝は幅約5m、深さ約1.4~1.8mの大規模なもので、若干クランク状になりながら走行していることから張り出し部分をもっていると考えられる。用途不明の木製品が出土している。他の屋敷を区画すると考えられる大溝は規模的には幅3~3.5m、深さ0.5mほどの溝で比較的浅い。遺物は少ないが、瓦質土器や土師器が出土している。区画溝SD-3050の溝底からは『永楽通宝』が一枚出土している。

まとめ 今回の調査では十六面・薬王寺遺跡の中世居館の範囲、すなわち、東限を確定することができた。この環濠の東側には中世遺構を検出しており、農耕地が拡がっていることが明らかになった。また、環濠ちかくの区画の単位はいま一つ判然としないが、24号バイパス工事に伴う調査で検出された区画単位（30~50m）よりさらに小さいようで一辺が12~12.3mほどになりそうで居館内における屋敷の構成が今後問題になろう。



▲区画溝完掘状況
(南から)

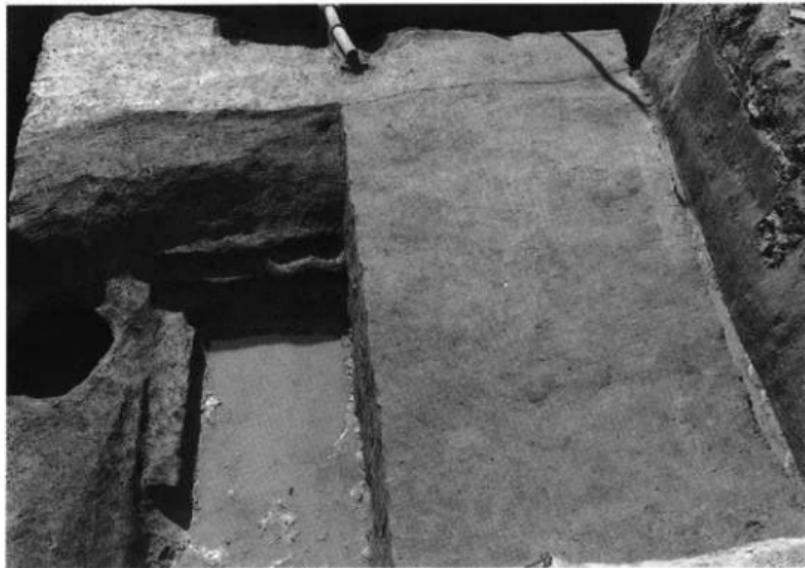


◀井戸（瓦質井戸枠）
検出状況

(12) 平野氏陣屋跡第4次発掘調査

立地と環境 平野氏陣屋跡は、寺川の西側に立地する約25万の中近世の遺跡群である。近世になって田原本町小字郭内を中心に陣屋や侍屋敷、寺内町、町屋が形成されたが、中世には「田原本氏」（奥城屋敷）や楽田寺、小室集落があり、これら遺跡群が複合している。平野氏陣屋跡の調査は既に3回おこなわれており、陣屋の東側を区画する大溝が検出されている。今回の調査地は役場敷地内の西南隅で、江戸時代の絵図面によれば家臣团屋敷地の西側外堀に相当する場所である。小字は「藪の内」である。

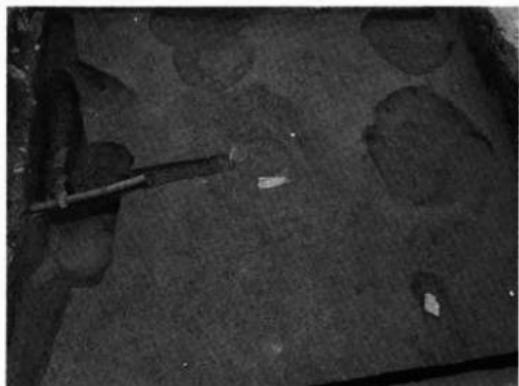
遺構と遺物の概要 検出された遺構としては、室町時代の井戸1基と大溝1条と近世～近現代の大溝1条と土坑数基がある。室町時代の大溝は調査区の南端で収束しており、延長6mを確認した。溝は東側の肩が調査区外となるため、幅は推定7mほどの規模を有すると思われる。深さは1.6mを測る。大溝はその堆積土層から数回にわたる溝ざらい、あるいは再掘削をしている。遺物は土器類が出土しているのみで少ない。最下層から14世紀末～15世紀の瓦器碗が出土している。井戸1は調査区の南端で検出した推定直徑3mの井戸である。大溝1が埋没した後、大溝の西南隅に重複するように掘削している。深さ1.9mを測る。灰色粘土層で埋没しており、遺物は少ない。近世～近現代の大溝2は調査区の西端で検出した大溝



調査地全景（東から）（室町時代）

である。大溝の東側肩の斜面が調査区内となつたため全容は把握できないが、南北方向に走行する大溝である。下層の出土遺物から江戸時代後期に掘削されたが、庁舎建設以前まで溝の機能は果たしていたと考えられる。溝幅は調査範囲内で2.3mあり、復元するとおおよそ6mほどの規模になろう。深さは1.3m以上ある。大溝中央の調査区西端では人頭大の角礫が5個並んでおり、石垣を作っていたのであろう。但し、この石垣は大溝の上層であり、近代の所産と考えられる。遺物は日常雑器の陶磁器類が大半を占めるが、瓦質や土師質の火鉢、炮烙、伏見人形、キセルなどが出土している。土坑1は調査区の東端で検出した穴である。大溝1が埋没した上に掘削された瓦溜めと考えられる。長軸2.3m、短軸2mの楕円形を呈す。深さ0.2mほどの浅い穴であるが、大量の瓦と若干の陶磁器類が混在して捨てられていた。この他、牛を形どった伏見人形も含まれていた。

まとめ 発掘調査地は陣屋に伴う家臣団屋敷地の西側外堀に当たる場所で、この堀にあたる江戸時代の大溝（大溝2）を検出した。この大溝の掘削時期は調査がほんの一端であったため判断できないが、江戸時代前期あるいは中期ごろの可能性がある。また、大溝の埋没については、幕末あるいは明治ごろに石垣を築き改修され、近代まで機能していた。このような石垣は第3次調査時にも検出しておらず、一連のものであろう。陣屋形成以前の大溝を検出できたことも1つの成果であった。それは陣屋の堀の東約1mで検出された室町時代（14～15世紀）の大溝1である。この大溝は陣屋の堀に並行するように掘削されており、陣屋形成以前の在地土豪（田原本氏？）の居館を囲む堀であろう。



調査地全景（南から）（江戸～明治時代）

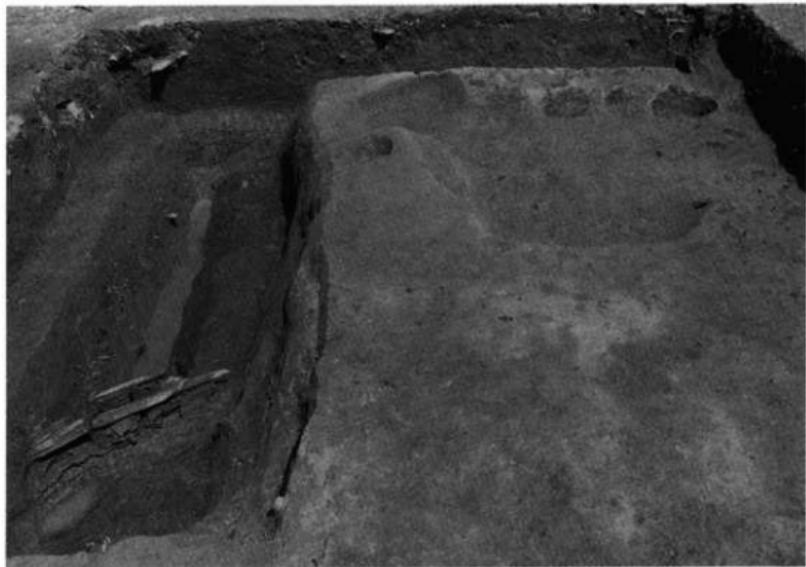


大溝出土瓦器碗

(13) 平野氏陣屋跡第5次発掘調査

立地と環境 平野氏陣屋跡の調査は既に4回おこなわれており、各調査では陣屋を区画する大溝などが検出されている。今回の調査地は現松村邸敷地の西端で、江戸時代中期の陣屋を表したと思われる絵図面によれば家臣団屋敷地内に相当し、「藤井」の邸宅が書き込まれている。小字は「郭内」である。

遺構と遺物の概要 室町時代の大溝1は調査区の東半分であり、南北方向に走行する。この大溝は調査区の北端断ち割り部分において土層確認のみである。廃土処理不可能なため、調査はおこなっていない。調査では大溝の西側斜面の検出であって溝の規模は不明である。推定するならば幅7m、深さ1.2mほどになろう。遺物は土器類が出土しているのみで少ない。近世の大溝2は調査区の西端で検出した大溝である。大溝の東側肩の斜面が調査区内となつたため全容は把握できないが、南北方向に走行する大溝である。大溝は調査区の南端で収束しており、延長6mにわたって検出した。下層の出土遺物から江戸時代後期に掘削されたが、庁舎建設以前まで溝の機能は果たしていたと考えられる。調査できた溝幅は3mあり、復元するとおおよそ6mほどの規模になろう。深さは1.5m以上ある。大溝の南端において囲み状の施設が見られた。これは杭を8本打ち込み、板を挟み込んだものであるが性格について



調査地全景（南から）

は不明である。遺物の大半は、この大溝から出土している。瓦や陶磁器類、土師質や瓦質の容器類など日常雑器が多い。寛永通寶が1点出土している。

まとめ 発掘調査地は、絵図面によれば陣屋に伴う家臣團屋敷地内に当たる場所で、「藤井」邸の西側には「堀」が描かれている。この「堀」は既に道路と敷地に変貌していたが、発掘調査によって江戸時代の大溝（大溝2）を検出することができた。この大溝の掘削時期は調査がほんの一端であったため判断できないが、江戸時代前期あるいは中期ごろの可能性があり、第4次調査で検出した大溝2と一連のものであろう。しかし、この大溝については、溝の東半分を調査したのみで不明な点もあるが、石垣は築かれていよいようである。また、陣屋が形成される以前の大溝を検出できたことも1つの成果であった。それは陣屋の堀の東約1mで検出された室町時代（15世紀）の大溝1である。この大溝は、第4次調査同様、陣屋の堀（大溝2）に並行するように大規模に掘削されており、これら一連の大溝は在地土豪（田原本氏？）の居館である可能性が出てきた。このようなことから陣屋の地割りは既にあった中世居館の地割りを継承し、わずかに拡大していることが確認された。



大溝の囲み状施設



大溝出土茶碗



大溝出土こたつ

(14) 法楽寺遺跡第1次発掘調査

立地と環境 法楽寺遺跡は斜めに走行する太子道に面し、北には島根山古墳を盟主とする三宅古墳群、南には弥生時代から古墳時代にかけての大集落である保津・宮古遺跡など著名な遺跡群に囲まれている。また、弥生・中近世の黒田遺跡、黒田大塚古墳とも重複している。遺跡面積はおよそ1万m²におよぶ。法楽寺は現在、本堂と鐘楼のみを残すが、現存する板繪図（長禄三年・1459）から25宇を数える大寺院であったことが窺える。法楽寺縁起によれば、聖徳太子の開基とあるが、考古学的調査は緒についたばかりであり、建立時期や寺院構造については今後の調査を待たなければならない。調査地は現法楽寺の東隣接地で、小字は「寺垣内」である。

遺構と遺物の概要 検出された遺構としては、古墳時代、鎌倉時代、近世～現代の各時代のものがある。古墳時代の土坑1は調査区の南東隅において検出した長方形の浅い土坑で、2辺のみ確認した。全容は不明であるが、1辺5.5m以上×2m以上である。深さは深い所で0.3mを測るが、全体では0.2mである。性格不明である。時期は古墳時代初頭の土器片が少量出土している。鎌倉時代の井戸1は調査区の中央で検出した2.2×2mの井戸である。深さ1.25mを測る。井戸の底には2段に重ねた曲げ物を転用した井戸枠が据えられていた。遺物は上層から完形の瓦器碗2点、土師器の小皿3点が出土した。井戸2は調査区の南西端で検出した直径1.8m、深さ1.6mの井戸である。井戸枠はなく、素掘りの井戸と考えられる。



調査地全景（西から）

遺物は井戸の中程（下層上位）から完形の瓦器椀5点、瓦器皿2点、土師器小皿5点が出土した。これらの遺物は井戸の機能がなくなった段階に捨てられたものであろう。溝1は調査区の西端で検出した幅1.8m、深さ0.2mの浅い溝である。溝の上面が削平されていることから本来はもう少し深い溝であったと考えられる。溝の北端は収束しており、延長5mを検出したことになる。溝の底には不規則な小穴があるが人為的なものかどうか判断できない。遺物は黒色土器や瓦器椀の小片が出土している。注目される遺物として、中国・明？の染め付け茶碗がある。これは溝1の西側肩より出土したものである。一度割れたのを接合しており、貴重な品物であったことがわかる。底部には「十六」と朱書きされており、寺物であった可能性が高い。近世・近代の小溝を調査区の全面で幅0.4m前後、深さ0.2mあまりの小溝を検出した。小溝は南北方向に42条検出あり、大半は江戸時代のものと考えられる。

まとめ 法楽寺遺跡の調査としては第1次であり、今後の課題を多く残すこととなった。小規模な面積のため、調査地の性格については不明な点が多い。調査地は本米、寺院境内であって土地は高かったと推定されるが、寺の衰微にともない近世には水田と化し、おそらく、1mほどの土が削平されたと考えられる。検出された鎌倉時代の井戸2基はその位置から境内の中と考えられる。2つの井戸は近距離にあることから同時存在したと考えにくく、井戸2→井戸1の変遷が推定される。



▲井戸1 遺物出土状況



◀井戸1 井戸枠検出状況

(15) 羽子田遺跡第5次発掘調査

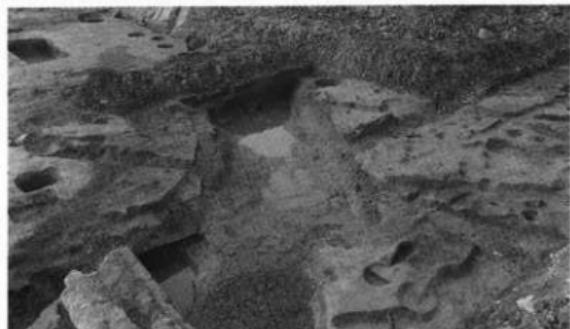
立地と環境 羽子田遺跡は、田原本町小室集落から大字新町・八尾にかけてひろがる弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。この遺跡はもともと牛の埴輪などが出土した田原本町小字羽子田382-3番地にマークされていたものであったが、その後の周辺調査によって南北400m、東西200mの広範囲の遺跡であることが判明してきた。特にその中心となる時代は古墳時代前期から後期にかけての大古墳群である。それは周辺の小字名に「三ツ山」があることからも推測できる。調査地はほぼ遺跡の中央部で、田原本小学校の敷地内である。第1・2次調査が小学校グランド西側拡張に伴う調査（西110m）、第3次調査が体育館新築に伴う調査（北西100m）をおこなっている。

遺構の概要 検出された遺構としては、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代、近世～現代の各時代のものがあるが、その中心の時代は弥生～古墳時代である。

弥生時代の遺構としては中期後半の井戸2基、土坑8基、後期後半～終末の井戸5基、その



調査地全景▶
(西南から)



古墳時代大溝▶
完掘状況

他落ち込み地形がある。弥生時代中期（第IV様式）の井戸や後期～終末の井戸からは完形土器がいずれにも含まれていた。特に後期後半の井戸（SK-2106）では中層から下層にかけて壺を主体とする完形土器が12点出土するなど、井戸への土器の供獻が盛んにおこなわれていたことが判明した。

古墳時代の遺構は方墳の周濠と考えられる濠を1条、性格不明の大溝を2条検出した。周濠は幅約3.5～5m、深さ約0.8mで一辺14m以上の方墳と推定される。遺物は若干の須恵器と埴輪、木製品が出土したが、埴輪が本墳のものかどうかは不明である。他の2条の大溝は幅約3.5m弧状を描き収束する溝で、古墳とは考えにくい。時期は6世紀前半である。

奈良～平安時代にはいわゆる「中世素掘り溝」と呼ばれる溝があり、幅0.3～0.5m、深さ0.1mほどの規模であるが、その方向は南西から北東方向に走行しており、条里に合わない



◆井戸（SK-2106）

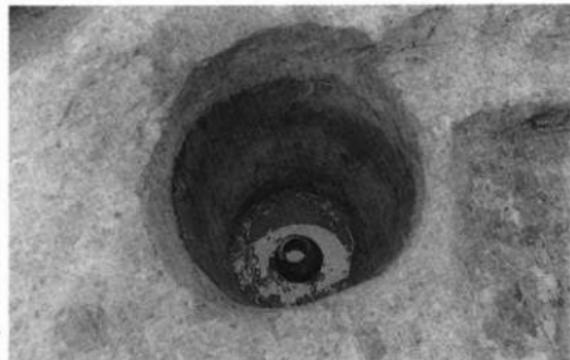


◆遺物出土状況
(弥生時代後期)

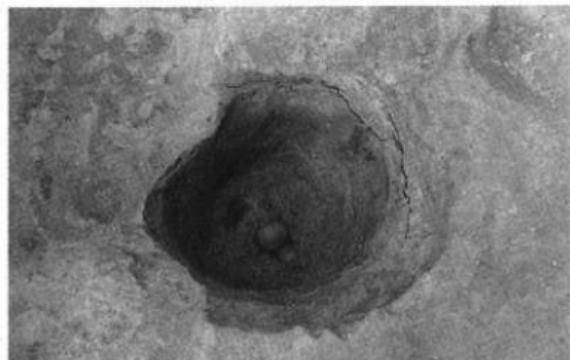
ものである。この小溝は古墳の墳丘側ではなく、北西に掘がっている。

遺物の概要 出土した遺物の大半は弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけてものである。特に注目されるのは井戸に投棄されていた完形土器の一括資料である。SK-2106から出土した土器のなかには被籠痕跡のあるものが含まれていた。

まとめ 今回の調査は、プール建設に当たってかなり破壊を受けていたが、免れた部分において大きな成果を上げることができた。調査地は弥生時代中期以降、井戸などの発見から小規模な集落を形成したとみられるが、集落の経営は断続的であり、保津・宮古遺跡あるいは唐古・鍵遺跡の「衛星ムラ」的な存在であったと考えられる。出土土器だけみると、唐古・鍵遺跡のものとほとんど遜色がないものである。古墳時代においては小規模な方墳を検出したことにより、このあたり一帯が古墳群であったことが判明した。また、古代においては微高地縁辺部に条里に合わない斜行小溝の存在があきらかになり、条里施工の問題を提起した。



井戸（SK-3103）
遺物出土状況▶
(弥生時代中期)



井戸（SK-107）
遺物出土状況▶
(弥生時代後期)

(16) 笹鉢山古墳第1次発掘調査

立地と環境 笹鉢山古墳は、田原本町大字八尾小字山本に所在する東向きの前方後円墳である。標高47mの沖積地に立地する。『大和国古墳墓取調書』によれば、「笹鉢山」という。水田のなかに鬱蒼とした小山としてたたずんでおり、墳頂には稻荷神社が祭られている。また、北側には幅3mほどの濠があり、水田や道の地割りから周濠の跡がうかがい知れる。本古墳の東450mには各種形象埴輪と鳥や笠形木製品が出土した石見遺跡(古墳)、また、西1kmには黒田大塚古墳をはじめとする三宅古墳群、南1kmには牛の埴輪などが出土した羽子田遺跡(羽子田1号墳)をはじめとする羽子田古墳群がある。調査地は笹鉢山古墳の西18mの南北水路であり、工事掘削幅は2.3mで延長100mに及んだ。

遺構と遺物の概要 検出された遺構としては、笹鉢山古墳の周濠の他、もう1基の古墳の周濠が検出された。この他に古墳時代の土坑2基がある。墳丘の残っている前方後円墳を「笹鉢山1号墳」、その北側の円墳と考えられる古墳を「笹鉢山2号墳」とする。笹鉢山1号墳はボーリング調査から推定全長96mの2重周濠の前方後円墳であることが判明した。発掘調査では、外濠にあたる部分を円弧を描くように延長38mにわたって検出した。外濠は深さ約0.8mで濠底は比較的平坦である。外濠の堆積層は大きく分けると、上層は灰褐色粘質土層、下層は灰黒色粘土層である。出土遺物は上層下位より円筒埴輪、須恵器・土師器などの土器、少數の木製品が出土した。



鉢山2号墳は1号墳の北28mで検出した古墳である。発掘調査ではちょうど円墳部の三分の一のところを検出したことになる。墳丘部分は既に削平を受けており、まったく墳丘の盛土は残っていないかった。周濠は北側で収束することから、陸橋部をもつ円墳あるいは前方後円墳と考えられる。周濠の円弧から復元すると墳丘の直径約19.5mの円墳になる。墳丘部分は削平を受けていたが、墳端ちかくで径0.35~0.5mの柱穴2基を検出した。周濠は幅約3m、深さ1.1mを測る。周濠の堆積層は大きく分けると、最下層：灰黒色粘土層、下層：黄灰色粗砂層・灰黒色砂質土層等、中層：黒褐色粘土層（植物腐植土層）、上層：黄褐色粗砂層・黒褐色砂質土層、最上層：茶灰色粘土層となり、砂と粘土の互層堆積であることが分かる。出土遺物は南側の周濠からまとめて出土したが、最下層・下層・最上層は遺物が少ない。下層上位では不明部材の木製品や弥生土器、中層では笠形木製品・楯形木製品・不明（鳥形？）木製品などが周濠中央部分で出土した。また、周濠の上層では墳裾ちかくで円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（人物3・馬3・蓋1）が倒れて流れ込むような出土状況を呈していた。北側の周濠は、南側に比べ埴輪などの遺物は少ない。注目されるのは墳裾に張り付くように杭と横木が検出されたことで、土留めと考えられる。他に縄文晩期の土器や弥生土器は2号墳の周濠内から検出されている。しかし、土器は摩耗はしておらず、近くにあった当該時期の遺跡のものであろう。弥生土器は後期の壺で、河内の所産である。

土坑1は1号墳と2号墳の間で検出した長軸1.5m以上、短軸0.7m、深さ0.6mの不整形な穴である。東南側は幅0.4mの小溝につながっている。上層から須恵器の壺が1点出土しているが、土坑の性格は不明である。



▲2号墳全景（北から）



▲2号墳遺物出土状況（南から）

第3表 1号墳の推定規模

全長	墳丘全長	後円部径	後円部高	外濠幅	中堤幅	内濠幅
95 m	54.5m	33 m	5.3 m	4 m	8 m	8 m

まとめ 笹鉢山古墳の調査として、初めて調査をおこなったが大きな成果を得た。1号墳は、地形測量と発掘調査、ボーリングの結果、全長95mの2重周濠の前方後円墳であることがわかった。2重周濠は、天理市・星塚2号墳（全長87m）と畿内の大型前方後円墳以外では、関東あるいは九州に若干みられる程度でひじょうに少ない古墳であることが判明した。遺物は後円部外濠部分のため、土器と円筒埴輪が出土したのみである。ただ、円筒埴輪は2号墳に比べ大きく、古墳の大きさによって使い分けているようである。

2号墳は調査当初、予想もしていなかった古墳である。周辺は削平を受け水田と化しており、古墳の面影は全くなく、遺物の散布も全く見られない状況であった。調査では径19mの円墳と考えられる周濠部分に当たった。周濠内には円筒・朝顔・各種形象埴輪、各種木製品が倒れこむように出土し、小規模古墳にも木製品が伴う貴重例を提供した。形象埴輪は残りがよく、馬や人物など全容のわかる良好な資料となる。円筒埴輪は特異なタキ手法がみられ、埴輪工人を探る上で1つの手掛かりになると考えられる。

また、2号墳に土留め用の施設が見られたことは古墳の例としてはあまり類例がなかろう。1号墳と2号墳の築造時期が問題となるが、円筒埴輪・須恵器からすれば、2号墳が6世紀前半、1号墳がそれに続く時期と考えられる。しかし、1号墳の時期決定の資料が少なく、今後、墳丘や内濠等の調査が必要である。

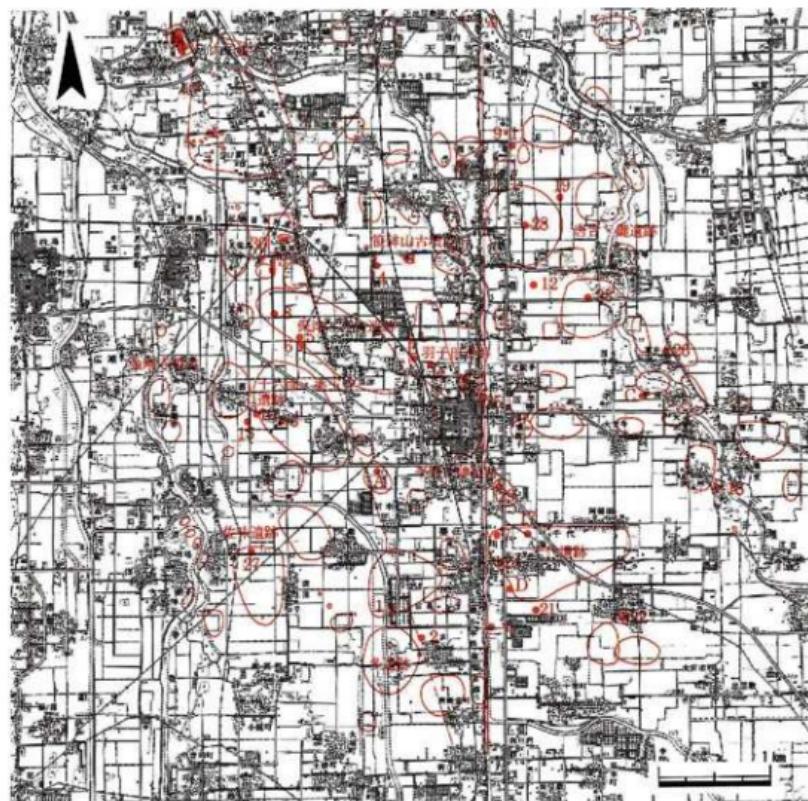


2号墳出土人物・馬形埴輪

III. 試掘調査・立会調査の概要

試掘調査と立会調査は平成4年度と5年度の2カ年で35件を数える(第4・5表)。宅地関連の開発は市街地の西北側にやや集中しているようである。それとは別に、駐車場等の開発は、前年度に引き続き田原本町千代が目立つ。清水風遺跡では、ガソリンスタンド建設に伴って2度の立会を行ったが、弥生時代中期の河道を検出できた。これにより、唐古・鍵遺跡と清水風遺跡でそれぞれ見つかっていた河道をつなぐことができるようになった。

試掘を行った4件のうち、羽子田遺跡が2件を占める。いずれも住宅地建設に伴うもので、古墳の周濠を検出している。このうち新町141-1番地は平成6年度に本調査を行った。



第4図 田原本町の遺跡と試掘調査・立会調査地点

第4表 平成5年度 試掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進度番号 (田代文)	進度日	調査日	内容
A	魔王寺南	田原本町魔王寺 141-1番地	藤井 増	賃貸住宅建設	46	5.5.13	5.9.16	4×4mの試掘坑を2か所設定。包含層から古式土器が出土。盛土が1.8mあるため、遺構面には至らない。
B	羽子田 (第6次)	田原本町新町 64-1番地他	かとう不動産 株式会社	分譲住宅建設	234	5.10.25	5.12.15 5.12.16	道路予定地で幅0.8mのトレンチを5本設定。遺構の上面被出のみ行う。水面面から0.3~0.5mで古墳の発達、大甕、井戸などを検出。平成6年度に本調査。
C	平田	田原本町平田 57-1、東井上 223番地他50筆	木伊住宅(株)	ゴルフ場建設	225	5.10.13	6.1.18 6.1.19	フェンス基礎部分を中心として2×50mのトレンチ1本と2×4mの試掘坑を16箇所設定。大半は中世以前の初瀬川の屯聚原であるが、宝鏡で余良、宝鏡時代の遺物を含む層を確認。
D	千代	田原本町千代 211-1、212-3、 213-1、214-1、 215-1、216-1 番地	元家富春 他3名	青空駐車場 建設	212	5.9.30	6.1.27	試掘坑を4カ所設定。4×4mが3カ所、2×4mが1カ所。4世紀の土器を含む層がみられたが遺構はない。深さ1m未満で地山となる。
E	羽子田 (第7次)	田原本町新町 121-1番地	高崎光男	分譲住宅建設	287	5.12.14	6.2.2 6.2.3	道路予定地C 2×40mの東西調査区と2×37mの南北調査区を設定。東西調査区で古墳時代後期の方墳1基を検出し、室形埴輪等が出土。また古墳と思われる甕、弥生時代の包含層を検出。古墳時代前期の包含層は全地区で見られ、円筒埴輪が出土した。



羽子田（第7次調査）遺跡試掘トレンチ

第5表 平成4・5年度 立会調査一覧表

平成4年度									
番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	通達番号(田代教文)	通達日	調査日	内容	
1	遺物散布地 (県道跡地図 11-C-47)	出原本町古森 100-116番地	加納喜右衛門	住宅建設	265	4.2.7	4.4.6	盛土内での掘削。遺構等は未確認。	
2	太子道	田原本町多 54-1番地	田原本町長	水路工事			4.4.6	工事終了後の踏査。古墳時代の須恵器等が埋戻し七内に含まれる。	
3	十六面・棄土 等	田原本町十六面 265番地	中井 刚	住宅建設	266	4.3.13	4.4.8	2m×2mの試掘坑を設定。奈良時代・中世の遺構面を認める。	
4	下ノ道	田原本町千代 44-3, 51-3番 地	小沢啓司	共同住宅建設	242	4.1.17	4.4.9	浄化槽埋設坑で立会。盛り土は厚く、掘削は1.8mにも及ぶが、旧地表面には達しない。	
5	保津・宮古	田原本町宮古 208番地	岩井 修	農家住宅建設	180	3.10.16	4.4.23	掘削部は旧水田面下0.2m程度。盛土内のため遺構面は未確認。	
6	保津・宮古	田原本町宮古 151-4, 151-5, 151-6番地	吉田 実	住宅建設	252	4.1.20	4.6.24	浄化槽埋設坑での立会で深さ1.5mまで掘削。土壤層が深さ0.5mで出土。	
7	千代	田原本町千代 342-1番地	川口晴敏	青空駐車場 及び車庫	14	4.4.13	4.7.17	地表面から0.6mの掘削で盛土内にとどまる。包含層は未確認。	
8	保津・宮古	田原本町宮古 395-1番地	奈良市民生活 共同組合	冷凍倉庫建築	96	4.7.1	4.7.30	建築場所を今回開削(保津さ0.6m)するが、盛土内に止まる。	
9	清水風 (道跡外)	田原本町唐古 256-9, 257-3, 300-3番地	山光興産株式 会社	ガソリンスタ ンド建設			4.8.4	東美廃材工事部分で立会。砂質土層に赤生土層が含まれる。清水風道跡で見られた埴溝と通るものか。	
10	十六面・棄土 等	田原本町十六面 219番地	藤本岩藏	住宅建設			4.9.18	擁壁工事で立会。包含層あり。古墳・奈良時代の両道を後出し。	
11	清水風 (道跡外)	田原本町唐古 256-9, 257-3, 300-3番地	出光興産株式 会社	ガソリンスタ ンド建設			4.10.9	ガソリンタンク設置部分で立会。河の西半側と幅2mの溝を検出。河上層からは古墳跡出土。清水風道跡の北半の河を走る。	
12	唐古・鐵道跡 周辺	田原本町篠 41~50番地東側 水路	田原本町長	水路工事・ 仮設道路工事	195	4.10.5	4.11.4 4.11.26	水路工事部分で立会。掘削は0.6m前後で遺構面まで達していない。	
13	遺物散布地 (県道跡地図 11-A-73)	田原本町原田 210-1番地西側 水路	田原本町長	水路工事	194	4.10.5	4.12.9	掘削は0.8mで包含層・遺物等の確認はできなかつた。	
14	桂綬川古墳群	田原本町八尾 307-321番地北 側水路	田原本町長	水路工事・ 仮設道路工事	196	4.10.5	5.1.18	掘削深度は0.6m前後。包含層・遺物等は未確認。	
15	十六面・棄土 等 (道跡外)	田原本町西竹田 258-1番地東側 水路	田原本町長	水路工事			5.2.3	調査区の北半は河道。南半に遺物包含層。上部器片が出土。	
16	遺物散布地 (県道跡地図 11-A-64)	田原本町西代 1~3番地	上田龍一	住宅建設	316	5.2.4	5.2.8	地盤上に厚く、掘削は旧水田面下45cmに止まる。包含層は未確認。	
17	千代	田原本町千代 965-6番地	小林淳男	駐車場造成	310	5.1.29	5.2.24	擁壁部分で立会。削削は0.4mで終了。土壌が削平されたのみ。	

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	遺迹番号(田代文)	遺迹日	調査日	内 容
18	遺物散布地 (原遺跡地図11-D-6)	田原本町伊勢ノ 426番地	村屋神社	防火水槽埋設		5.2.22 5.2.23		土御器片が深さ0.6m~ 2.5mで出土。旧河道と みられる。
19	磨古・鍛	田原本町法貴寺 1229-1番地西側 通路	田原本町長	通学路	180	4.9.24	5.2.10	複数部分での立会。深 さ1.35mで河岸とみら れる粗砂層を検出。
20	平野氏陣屋跡	田原本町362-1, 364-11番地	中島俊雄	住宅建設	268	5.1.13	5.2.25	申請地南端水路改修部 分で立会。深さ約0.5m の掘削で、包含層は不 明。

平成5年度

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	遺跡番号(田代文)	遺跡日	調査日	内 容
21	千代	田原本町千代 141-1番地	原田岩男	宅地造成	331	5.2.18	5.5.10	申請地東側の壁塗部分 で立会。深さ0.6mまで 掘削。遺物は土壌層が見 られた。河川内の堆積 とみられる。
22	被教寺	田原本町味間 848-1, 848-2 番地	寺崎祥久	住宅増築工事	4	5.4.2	5.6.16	基礎部分の削削は深さ 0.4m。表土から層位の 変化は見られない。
23	法貴寺齊宮前 ・舞ノ井	田原本町法貴寺 904番地	坂本八重子	砂利置場	138	5.7.26	5.8.26	堆塗部南部分の立会。 60cm前後の掘削で、遺 物包含層にはならなか った。
24	千代	田原本町千代 1120-2番地	平井鶴	農業用倉庫建 設	187	5.9.3	5.9.10	倉庫建設後のため不明。
25	平野氏陣屋跡	田原本町816-1, 817-1, 818-1, 819-1番地他	田原本町長	消防ポンプ器 具車建設	186	5.9.3	5.9.16 5.9.17	基礎掘削部分での立会。 深さ0.8m。包含層はみ られない。等の浜水 堆積層が厚い。
26	東井上	田原本町東井上 170-1番地	森本信昭	栽培建設 (稚井)	129	5.7.19	5.10.20	基礎部分での立会。深さ 1.75mで土壌を包含す る層を確認。瓦礫と考 えられる。弥生時代中 期の土器が出土した。
27	佐味	田原本町佐味 202番地	松田吉雄	資材置場	84	5.6.7	5.12.6	南側掩蔽での立会。深 さ0.4m前後であり、包 含層は至らない。瓦 礫、土御器細片が出土。
28	磨古・鍛	田原本町蔵古 120番地	田原本町長	櫻閣復元工事	244	5.11.2	5.12.10	基礎掘削部分での立会。 矢板打ちのため不明。
29	駒手	田原本町駒手 621-4, 621-5, 965-3, 965-4 番地	細井武治	店舗建設	245	5.11.5	6.2.8	造成地内2ヵ所を試掘。 0.8×2.5mで、深さ1m。 客土のため、包含層の 有無は不明。
30	遺物散布地 (原遺跡地図11-A-33)周辺	田原本町黒田 80-1番地	三岡修二	電波塔建設	133	5.7.20	6.3.25	地盤改良部分での立会。 0.5mの掘削で包含層 はない。

田原本町埋蔵文化財調査年報 4

1992・1993 年度

平成 6 年 12 月 28 日

**編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 日進印刷株式会社**



羽子田遺跡第5次調査



唐古・健遺跡第51次調査



唐古・健遺跡第55次調査